

交通 評論



(1977)右田一杉一スタイルカップリング、菌頭カップリングなどを経て、いわば「真打ち」として登場したのが鈴木カップリングだ。有機ホウ素化学の権威であるブラウン教授のもとに留学した鈴木教授の、塩基を反応系に加えるという卓越した発想でできたこの方法である。この結合方法「鈴木(または鈴木)は非常に困難で、50年前に(宮浦)カップリング(1979)は日本人の名前は「他に余計なものがない、安全で、安価な方法」冠した最も有名な反応のIができれば「ノーベル賞もつである。ノーベル賞は当然である。MLから得た知識を総合するとこのようになる。」

1970年代になって、京都大学チームによるカップリング法の開発(熊田一玉尾カップリング)、改良法としての根岸カップリング

花形的な存在だった。建物学希望者のランクも下の方に入った途端に鼻につく独特の臭いとともに当時を思い出した。前述のカップリングに冠されている日本人の名前が多いことから、日本人がこの分野でいかに能力を發揮していたかが分る。

日本の高度成長の一翼を支えた化学工業は、しかしながら、その後50年の間に、若者に人気のない分野になってしまった。大学入試志望者の減少と同時に進

思われるが、便利さと快適さを追求して作り出された大量の化学物質が分解されずに、地表を汚し、海洋を汚し、ひいては生態系に悪影響を与えていることも一因である。この反省から、「化学」はいつのまにか悪役に落とされてしまった。しかし、新しいもの、便利なものへ要望は衰えず、一度作ってしまった便利なものを使わないようにするのは難しい。終戦直後の物資の無い時代を経験した筆者の世代でも、冷蔵庫や車のない世界に戻ることは非常に難しいのだから、当然に前のように全てがある世界に生まれたい若人たちが、昔の生活に戻ることは不可能だろう。

今年夏、富士山頂で大気汚染の観測研究を行った。いわば、科学技術進歩の負の側面を調べる仕事であるが、この観測に携わったNPOの研究者達も、鈴木カップリングのおかげで作られた液晶パネル付きの最新の測定装置のお世話になっている。

今後は、空気や水など当たり前と思っていた環境を資源と意識して、できるだけ完全に努める中で、安全性を上手に追求してゆく他は、人類は地球資源を使い果たすという形で現れているのだから。

(江戸川大学名誉教授・元気象大学教授)

鈴木カップリング

土器屋 由紀子